

チベット・モンゴル佛教の高麗傳來について

許 一 範

一. はじめに

韓國の佛教文化は歴史的な觀點から見ると非常に多様な様相を表わしている。即ち歴史的な文献資料及び現存している佛教關聯遺物を見ると印度・中國・チベット等からの影響を直接ないし間接的に受けていることが明かである。特に中國の場合は地理的に隣接していることにより、半島の佛教文化に大きな影響を及ぼしている。即ち新羅・百濟・高句麗によって分割統治されていた三國時代には中國から多くの佛教の經典が伝えられており、寺院の建築、僧侶の修行等にも多くの影響を及ぼしている。一方その三國から中國に留學された僧侶らは中國の各地の寺院の中で受學しながらその土地の文化を自國に傳えたのである。さらに三國時代から高麗時代にかけてはキョムイク（謙益）、チコン（指空）を初めとする多くの僧侶が印度から半島に入り活躍していたのである。

また高麗時代にはそれらの地域以外のモンゴル・チベット等からも佛教文化が伝えられている。現在この分野に関する研究はあまりにも行なわれていない。しかしながらその時から現在に至るまでモンゴル・チベット等の佛教が半島の佛教文化に至大なる影響を及ぼしていることには間違いない。ここで最近まで公表されていない幾つかの新しい資料を中心としてその當時の佛教文化の様相について検討して見ることにする。

二. 現存モンゴル關係文件中のチベット文資料

1. 圓鑑國師とチベット文文件

まず『松廣寺庫』中篇の「人物部」に依るとウォンカム（圓鑑）國師チュンジ（冲止）は西暦 1275 年 49 世の時、チュンヨル（忠烈）王の許可を得てモンゴルの都に入り、國賓としてモンゴルの皇帝に会い、スソン（修禪）寺の寺田の問題を解決してから歸國されたと云われている。即ち國師がモンゴルに入ることになっ

たことは修禪寺に属していた寺院の土地がモンゴルの軍隊に没収されたからである。このことにより圓鑑國師はモンゴル皇帝に上表文を舉げることになったのである。¹⁾ その時モンゴルの皇帝は國師の上表文を読んでからその文章の内容について高く評價し。國師をモンゴルに招請することになり、高麗の忠烈王も國師のモンゴル入國について許可したのである。また任務を終え、歸國の時に皇帝は國師に黄金の絲で作られた袈裟と法具類を與えたという記録がある。²⁾ このことはその當時の政勢によりモンゴルの佛教文化が高麗に傳われた一面を見せてくれる事件である。

ここでわれわれが注目すべきであることは圓鑑國師關聯の現存するチベット文の文件である。³⁾ その文件はその當時圓鑑國師がモンゴルと高麗を往來する時に使われた一種の通行證明書であるであると傳われている。まだその内容については不明な所が多くあるけれどもその文件のおわりに軍隊の職位を表していると思われる“sde len po なる nob paḥi yi ge”という署名と印鑑が押されており、何らかの證書ではないかと考えられる。

2. 李氏家系中のモンゴル文斷片

モンゴル語で書かれているこの文件の斷片は現在ピョンチアン（平昌）李氏の家系譜の中に収録されており、またそれと關聯を持っている口傳等も傳えられている。⁴⁾

まずこの文件が家系譜中に収録された経緯については“ピョンチアン李氏の始祖であるリクワン（李匡，西暦1182年）の第9代目の子孫にあたるリダルハン（李達漢，西暦1380年）によって保管されていたものである。一方モンゴル語文件を初めから所持していた人物は彼の父親であるリソン（李晟，西暦1320年）という人物である。彼はモンゴルと明の間で起きた戦争に高麗から派遣された將軍として大きな戦果を挙げた”と言われている。⁵⁾

その時モンゴルの皇帝から與えられた物中の一つがこのモンゴル文字で書かれた文件の斷片である。その文件に表われているモンゴル文字の特徴は文章を横書きではなく、チベット語とは異なる縦書きで書きながらチベット語の前接字、後接字、再後接字、有冠字、有足字に書かず、基本文字と母音符號のみを持って單語を組み合わせている。これはチベット文字を採用し、制定されたモンゴル語文字の初期形態であり、音節と音節の間を区分するために間隔を置いている。即ち現存するピョンチアン李氏の家系譜中にモンゴル文字で書かれている文件の斷片

を見るとチベット文字を若干變形した形態である。またその中のこの文件の斷片は完全な状態として残されず、文字自體も多く變形されており、読み出すことができないところが多く見當るけれどもそれは初期モンゴル文字で書かれた文件であることには間違いない。

その文件の内容は西暦 1334 年の正月にモンゴル皇帝から與えられた一種の任命章である。⁶⁾ このように高麗時代後期にはモンゴルと不可分の關係を持ち、チベット文或いはモンゴル語文件が傳えられたのである。

三、チベット文五佛眞言の展開

1. 演福寺梵鐘のチベット文五佛眞言

この鐘は西暦 1346 年高麗チュンモク（忠穆）王 2 年モンゴルの影響を受けて造られたものであり、ケソン（開城）のヨンボク（演福）寺に安置されていたものである。『海東の佛教』中の圖録によるとこの鐘の表面には梵字とチベット文字で刻まれた五佛眞言がある。⁷⁾ ただこの資料中の圖 233 の“Om akṣobhya hūṃ svāhā”（阿閼佛の眞言）.. “Om ratna sambhava trāḥ svāhā”（寶生佛の眞言）と圖 234 の“Om amitābha hriḥ svāhā”（阿彌陀佛の眞言）だけを持って全體的な内容について把握することは不可能である。しかしながらそこには毘盧遮那佛、寶生佛、阿彌陀佛、不空成就佛の眞言が刻まれていることには間違いない。このような五佛眞言は韓國佛教の中ではあまり見當らないものであり、朝鮮時代に到り、『眞言集』⁸⁾の中で悉曇文字で書かれた五佛眞言に展開して行くことになる。

2. 七長寺五佛像と五佛タンカの展開

朝鮮初期になるとこのような五佛眞言は佛像、タンカの中で展開していくのである。その中にはチルジャン（七長）寺の四方四佛石造物と五佛タンカがある。その寺院は 7 世紀中半に建てられており、高麗時代である西暦 1014 年ホンジョン（憲宗）王 5 年にヘソ（慧炤）國師によって重建された以來、朝鮮時代まで五回にかけて補修されたのである。その寺院の大雄殿には五佛タンカ、六字眞言刻印梵鐘等がある。⁹⁾

その中で五佛タンカは毘盧遮那佛を初め、諸佛菩薩、護法神衆、聲聞衆等を表わしている西暦 1628 年のものである。全體的な形式は五段になっており、タンカの上段には中央の智拳印を結んでいる毘盧遮那佛を中心としてその左右には阿閼佛と不空成就佛が位置している。中段には左側に寶生佛、右側には阿彌陀佛が主

尊として眷属に圍まれている。さらに大雄殿の前面の段階の下には四方四佛石造物等がある。しかしながら現在その用度については明確に把握することができない。ただその石造物の上に佛像或いは塔を安置していたのではないかと考えられる。

現在その物の正面には左手に與願、右手に説法印の佛、側面には左手に與願、右手に觸地印の佛、後面には定印の佛、また他の側面には左手與願印の上に實珠、右手に説法印の佛が彫刻されている。

これらの尊形は各各不空成就佛、阿閼佛、阿彌陀佛、實生佛を表わしていると考えられる。ここで實生佛の左手に載せられている實珠の場合、それを藥函として見るならば藥師如來であると見ることができる。しかしながら實珠を持っている實生佛の尊形はチベット佛教の佛像の中では一般的に見つけられるのである。さらにこの石造物の上にもし佛像が安置されていたと云うならば毘盧遮那佛であり、塔が置かれていたとするならば毘盧遮那佛を意味する五層塔ではないかと考えられる。ただ現在この石造物の上には四角の平面に圓形の穴が掘り出されているだけである。われわれはこの寺院の四方四佛石造物、六字眞言刻印梵鐘等を通じて高麗時代を経て朝鮮時代に到るまでの佛教文化の變遷を読むことができるのである。

3. 五臺山の五佛曼荼羅

この曼荼羅は朝鮮時代初期に當る 15 世紀に作られており、¹⁰⁾ 高麗時代の信仰形態を受けついたものであると考えられる。全體的な形式は金剛界曼荼羅を基本として外院に發願者の誓願を表わしている功德成就のための曼荼羅である。しかしながら内容的に見ると當時の信仰を反影した朝鮮時代獨自のものであると考えられる。この曼荼羅の構造は第一院の中心には五つの悉曇種子がある。それは主尊と四波羅蜜菩薩、その上下左右の四つの圓中にある五つずつの種子は四佛と十六菩薩を表わしている。その外側の第二院の八葉蓮華中の八つの文字は八供養を表わしている。第二院の陀羅尼は罪障消滅と壽命延長を祈願する一切如來心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼を表わしている。¹¹⁾ また最外側には四つの種子を各各東西南北の方向に配當し、四攝菩薩を表わしている。このことは五佛眞言のもう一つの展開であると思われる。

4. 禮川龍門寺のマニコル

このマニコル (Mani hkhor, 摩尼輪筒) は高麗時代にモンゴルから傳わられてい

るものであり、イエチヨンヨンムン（禮川龍門）寺の大藏殿に設置されている。このものの原形とも言えるものは現在もチベット人の信仰生活の中で多く使われているマニコルである。したがって現在龍門寺の韓國唯一のマニコルはチベットから傳來され、モンゴル、高麗を経て現在まで伝えられていると考えられる。

その寺院のマニコルの製作年代は西暦 1190 年高麗時代ミヨンゾン（明宗）王 20 年のことである。現在大藏殿には二つのマニコルが左右に安置されており、その形式は八角形になっている。またその高さは 4.2 メタルである。とにかく高麗時代のマニコルもチベットのマニコルのように使われた当時の法具であったと思われる。

四. おわりに

以上のことからモンゴルと高麗の間の交流を通じてチベット系統の佛教文化が高麗に伝えられ、幾つかの文獻と遺跡を残されていることが明かになった。特に五佛眞言の展開を見ると高麗時代末期に鐘に刻まれていたものが朝鮮時代に到り、佛像、曼荼羅の建立まで影響を及ぼしている。

これらのことからわれわれは韓國佛教、その中でも韓國密教の展開について新しい方向から研究を進めて行かなければならないと考えられる。

- 1) 林錫珍, 『松廣寺誌』(佛日出版社, 1965)
 - 2) 『松廣寺庫』中篇, p. 143
 - 3) 韓國全羅南道 地方有形文化財 第 30 號, 1972 年指定.
 - 4) 平昌李氏啓仁君荏子洞派譜 (西暦 1966 年刊行本)
 - 5) このことについては平昌李氏の家系譜中につたわれている口傳を参考したのである.
 - 6) 金芳漢, 東亞文化第 10 輯, pp. 343 ~ 351.
 - 7) 中吉功, 海東の佛教 p. 261 (國書刊行會, 昭和 48 年)
 - 8) 西暦 1777 年, 韓國京畿道, 望月寺刊行本.
 - 9) 韓國 京畿道 安城, 七長寺所藏品
 - 10) 韓國 宝物第 793 號. 韓國江原道月淨寺博物館所藏.
 - 11) 大正. 19, p. 711c, 713c.
- 〈キーワード〉 五佛曼荼羅, 五佛眞言, マニコル, 五佛タンカ

(眞覺大學教授)